

オホーツク海宗谷暖流情報

(R7(2025)年8月下旬)

R7(2025)年8月29日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 宮園・品田)

- 8月下旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並みです(図1)。
- オホーツク海沖合の表面水温は、At消滅の目安となる15℃を約2カ月にわたって超えており(図2)、Atはほぼ消滅したものと推測されることから、麻痺性毒性値は今後も上昇する可能性は少ないと考えられます。
- 宗谷暖流情報は今回で終了します。

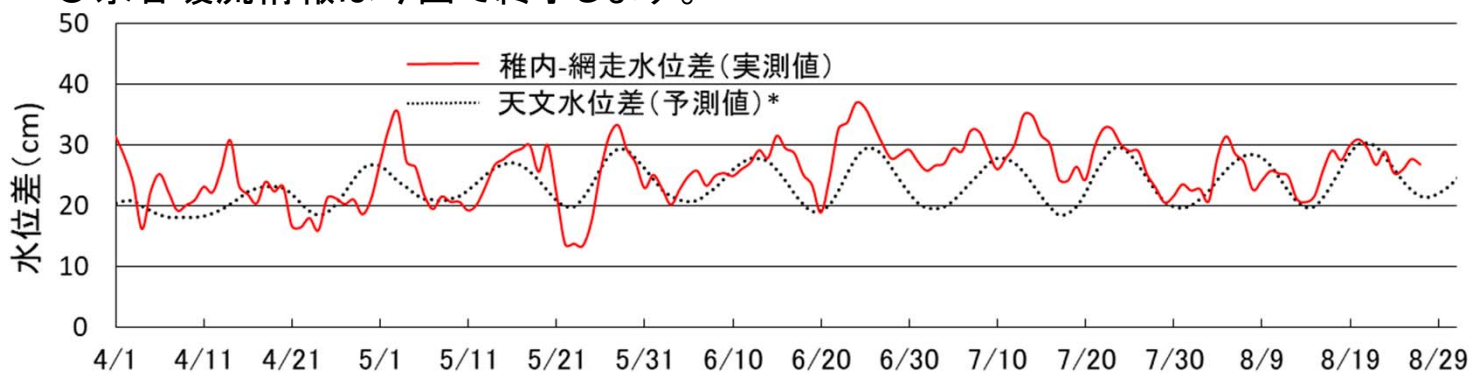


図1 R7(2025)年4/1-8/27の稚内と網走の水位差(宗谷暖流**の勢力) 月/日

*水位差の予測値は、潮汐表として公開されている天文水位差から算出することができます。
(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)

**宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

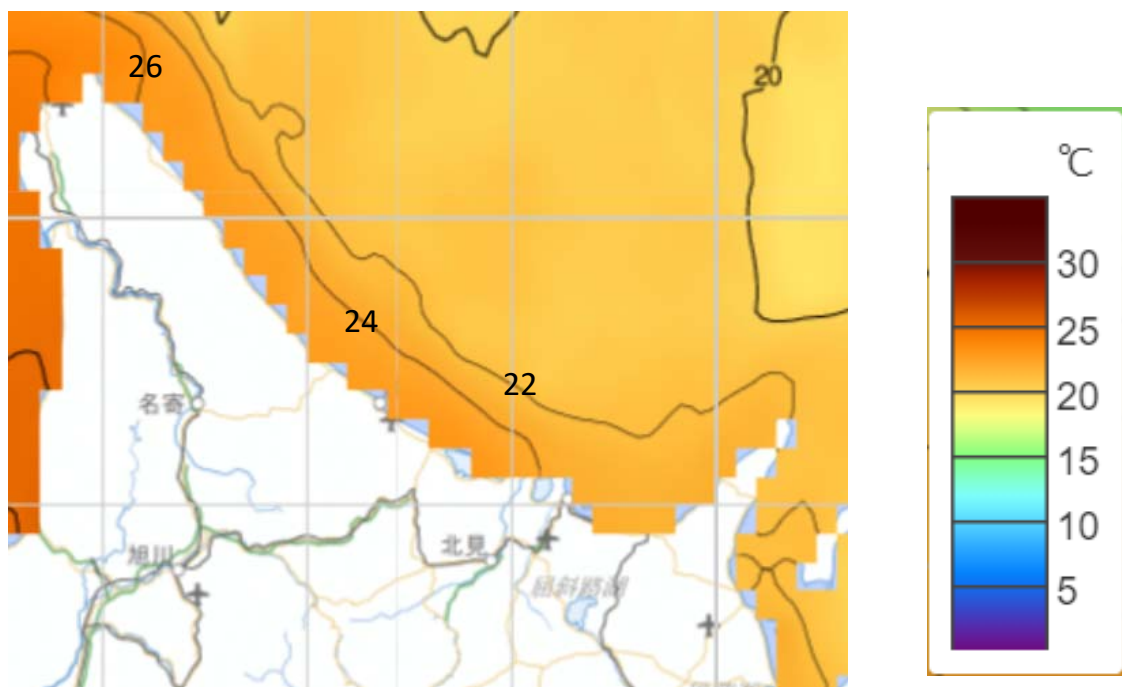


図2 R7(2025)年8/27 オホーツク海沖合の表面水温の分布

気象庁 海面水温実況図

http://www.data.jma.go.jp/gmd/kaikyuu/kaikyuu/tile/jp/index_sstanl.html#zoom:7/lat:43.783786/lon:142.648682/mapheight:600/colordepth:deep/element:sss

オホーツク海宗谷暖流情報

(R7(2025)年8月中旬)

R7(2025)年8月18日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 宮園・品田)

- 8月中旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並みですが(図1)、今後北寄りの風が続くと宗谷暖流は弱化する可能性があります。本年の7月下旬の広域分布調査では麻痺性貝毒プランクトンAtscが沖合にわずかに分布していましたが(図2)、沿岸定点では8月中旬には検出されていません。
- 宗谷暖流の勢力については、8月下旬に「オホーツク海宗谷暖流情報」として発信予定です。

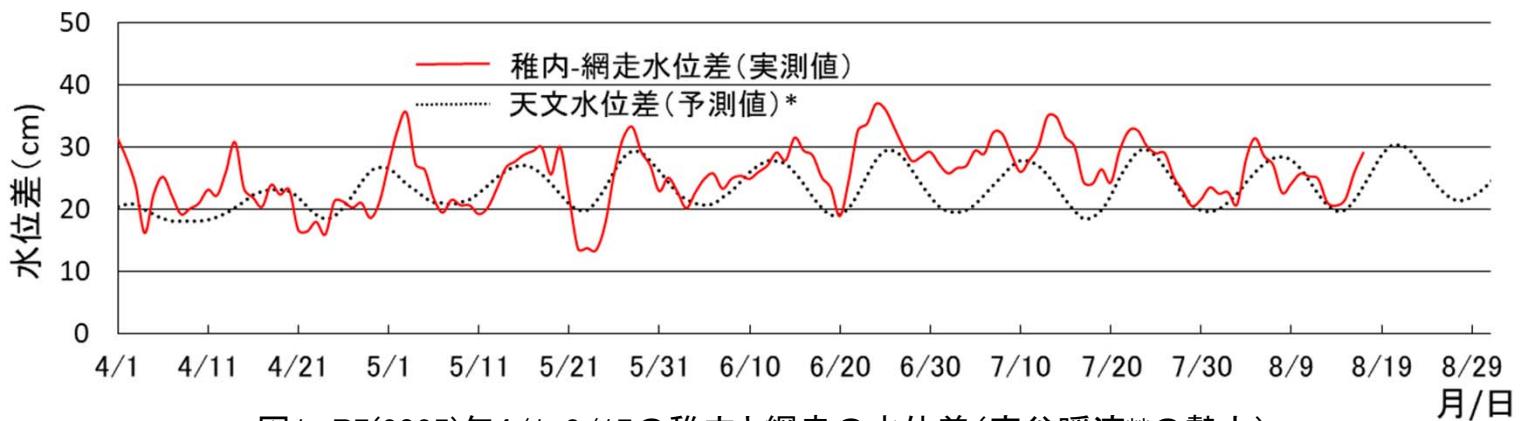


図1 R7(2025)年4/1-8/17の稚内と網走の水位差(宗谷暖流**の勢力)

*水位差の予測値は、潮汐表として公開されている天文水位差から算出することができます。
(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)

**宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

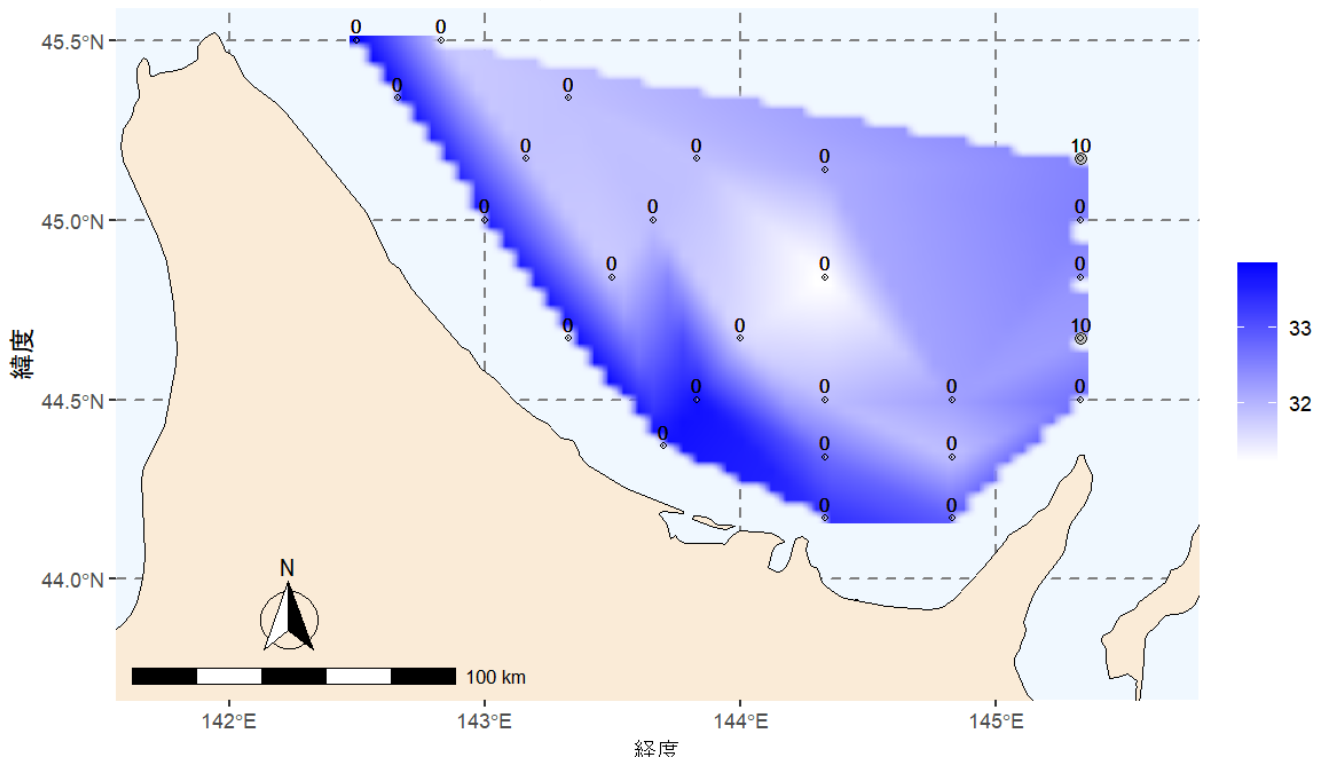


図2 R7(2025)年7/23-26表面塩分(青コンター)と のAtsc(灰丸・数字, 細胞/L)の分布
(0,10,20m層の最大値)

沿岸の高塩分帯は宗谷暖流, 稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果

*本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

オホーツク海宗谷暖流情報

(R7(2025)年8月上旬:臨時)

R7(2025)年8月7日

中央水産試験場資源管理部

(担当:海洋環境G 宮園・品田)

●7月23-26日にオホーツク海で行った麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ・スピーシーズ・コンプレックス(旧アレキサンドリウム・タマレンセ), 略称「Atsc」)の広域分布調査の結果(0,10,20m層の最大値)を速報します。

●Atscは、26定点中2地点で出現しました(最高10細胞/L)(図1)。毒化の目安となる100細胞/Lを超える密度での出現はありませんでした。

●8月上旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並みに推移しています(図2)。

●宗谷暖流の勢力については、今後も「オホーツク海宗谷暖流情報」として適宜発信予定です。

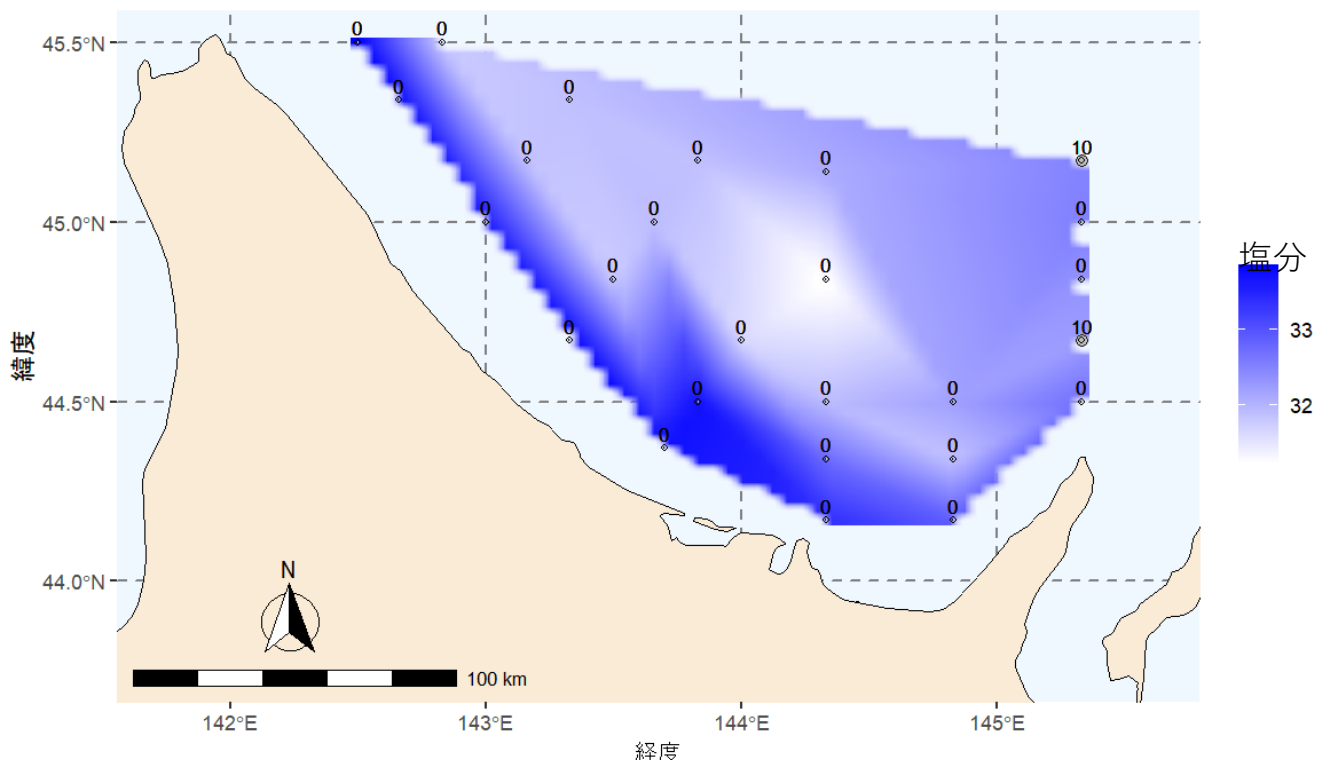


図1 R7(2025)年7/23-26表面塩分(青コンター)と のAtsc(灰丸・数字, 細胞/L)の分布
(0,10,20m層の最大値)

沿岸の高塩分帯は宗谷暖流, 稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果

*本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

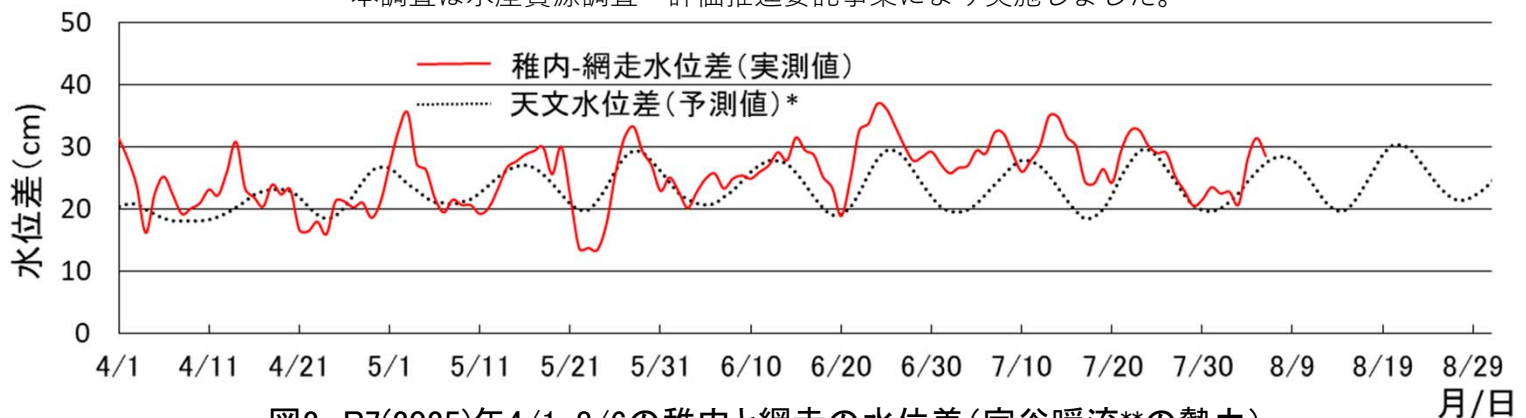


図2 R7(2025)年4/1-8/6の稚内と網走の水位差(宗谷暖流**の勢力)

*水位差の予測値は、潮汐表として公開されている天文水位差から算出することができます。
(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)

**宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

オホーツク海宗谷暖流情報

(R7(2025)年7月下旬)

R7(2025)年7月31日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 宮園・品田)

●7月23-25日にオホーツク海で行った麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ・スピーシーズ・コンプレックス, 略称「Atsc」)の広域分布調査の結果を速報します。

●Atscは、調査した26定点の0m層には出現しませんでした(図1)。この時期には10-20m層に出現することがありますので、次の情報でお伝えする予定です。

●7月下旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並み・やや高めですが(図2)、今後の推移に注意してください。

●宗谷暖流の勢力については、今後も「オホーツク海宗谷暖流情報」として適宜発信予定です。

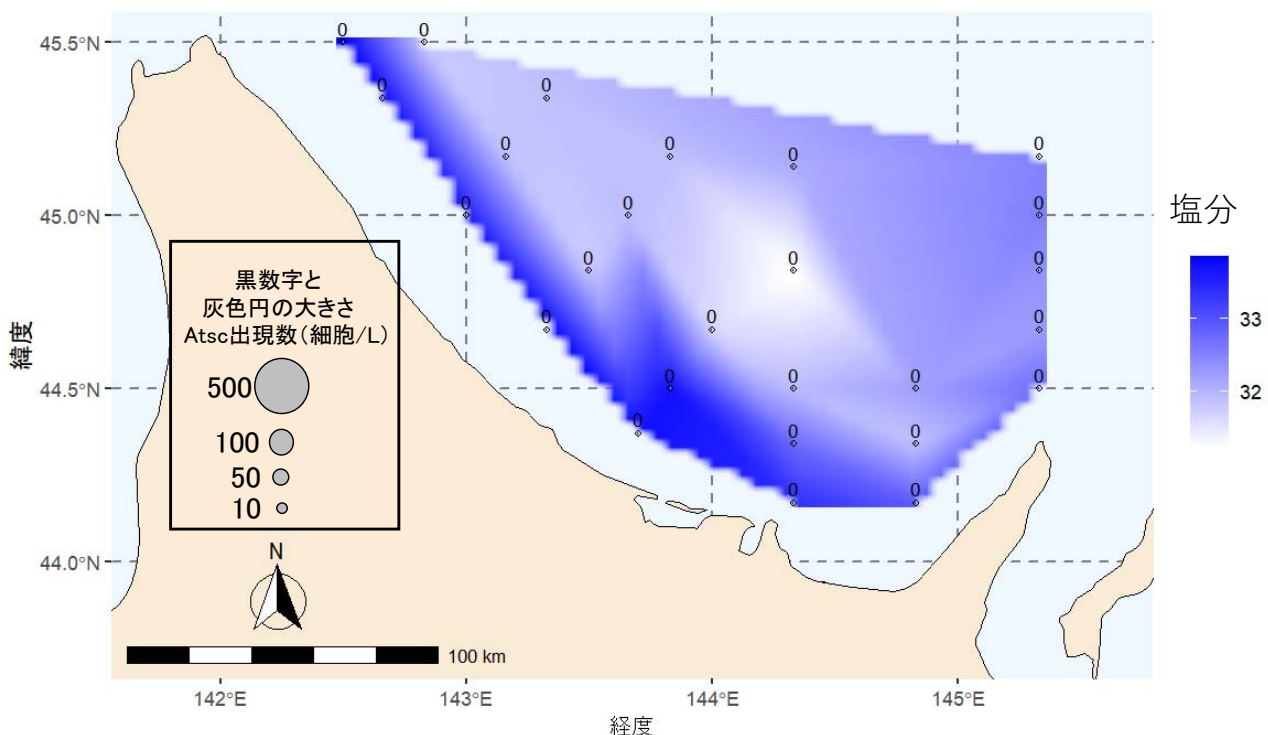


図1 R7(2025)年7/23-25 表面塩分(青コンター)と0m層のAt(灰丸・数字, 細胞/L)の分布

沿岸の高塩分帯は宗谷暖流, 稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果

*本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

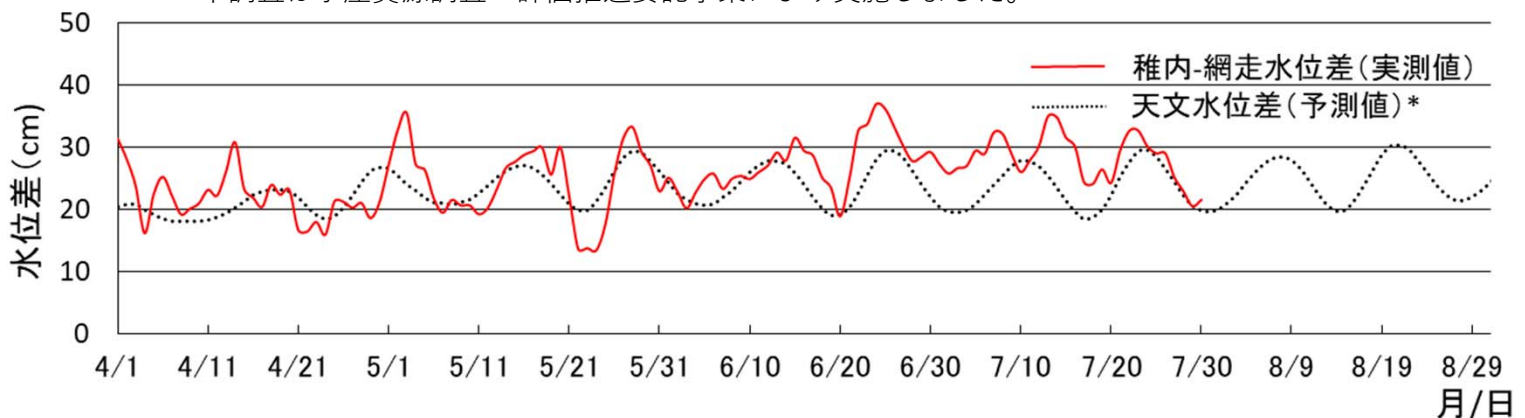


図2 R7(2025)年4/1-7/30の稚内と網走の水位差(宗谷暖流**の勢力)

*水位差の予測値は、潮汐表として公開されている天文水位差から算出することができます。
(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)

**宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

オホーツク海宗谷暖流情報

(R7(2025)年7月上旬)

R7(2025)年7月11日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 宮園・品田)

- 7月上旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並みですが(図1)、今後北寄りの風が続くと宗谷暖流は弱化する可能性があります。本年の6月上旬の広域分布調査では麻痺性貝毒プランクトンAtが沖合に最大10細胞/Lが確認され(図2)、ほとんど出現していません。
- 宗谷暖流の勢力については、適宜「オホーツク海宗谷暖流情報」として発信予定です。
- 次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。

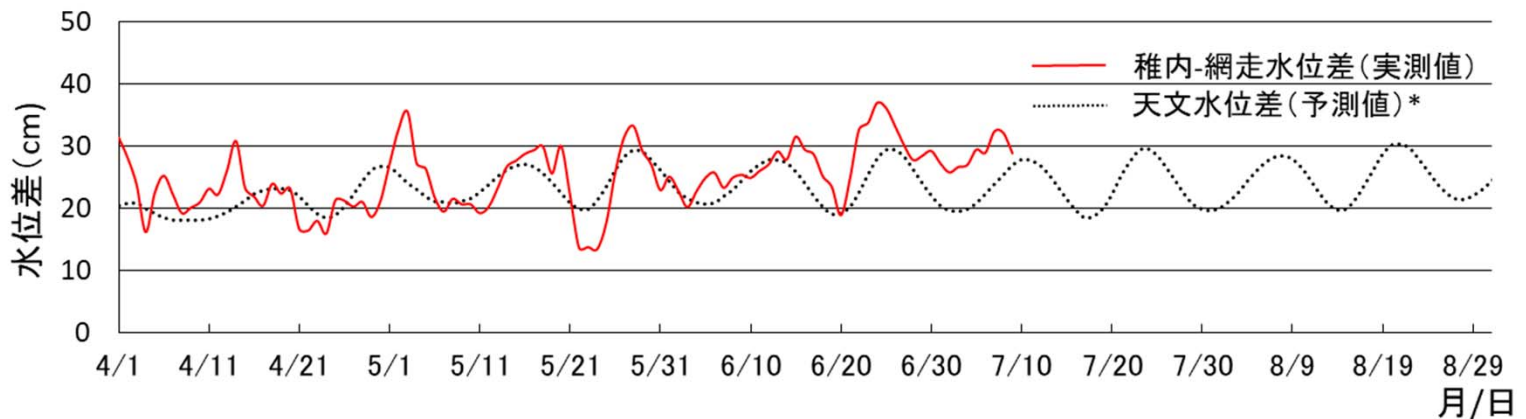


図1 R7(2025)年4/1-7/9の稚内と網走の水位差(宗谷暖流**の勢力)

*水位差の予測値は、潮汐表として公開されている天文水位差から算出することができます。
(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)

**宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

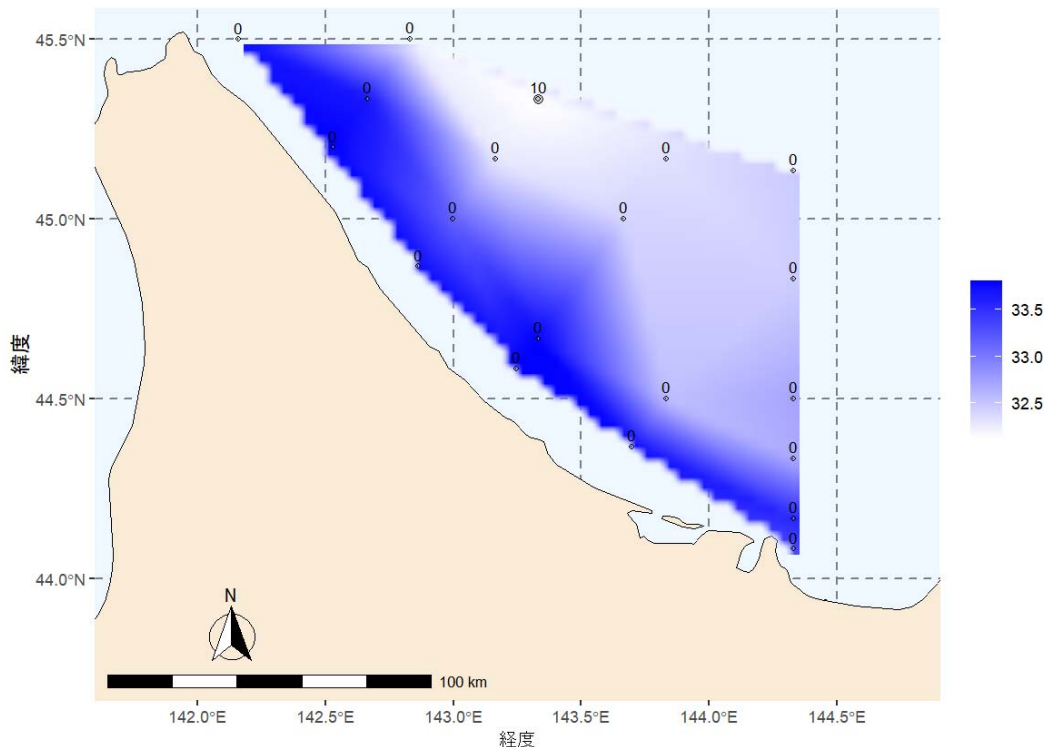


図1 R7(2025)年6/3-5の表面塩分(青コンター)と At(灰丸・数字, 細胞/L)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流, 稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果

*本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

オホーツク海貝毒プランクトン速報

(R7(2025)年6月下旬)

R7(2025)年6月27日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 宮園・品田)

●6月下旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並みですが(図1)、今後北寄りの風が続くと宗谷暖流は弱化する可能性があります。本年の6月上旬の広域分布調査では、麻痺性貝毒プランクトンAtが沖合に最大10細胞/Lが確認され(図2)、ほとんど出現していません。

●宗谷暖流の勢力については、適宜「オホーツク海宗谷暖流情報」として発信予定です。

●次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。

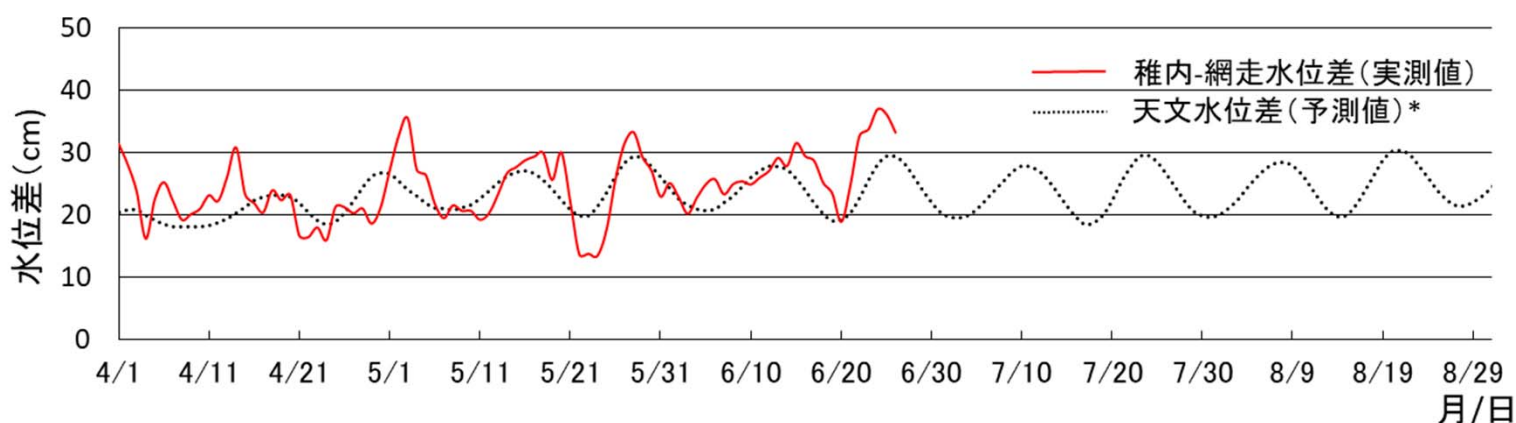


図1 R7(2027)年4/1-6/26の稚内と網走の水位差(宗谷暖流*の勢力)

*水位差の予測値は、潮汐表として公開されている天文水位差から算出することができます。
(実測値は気圧と風の影響を受けて変動します)

**宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

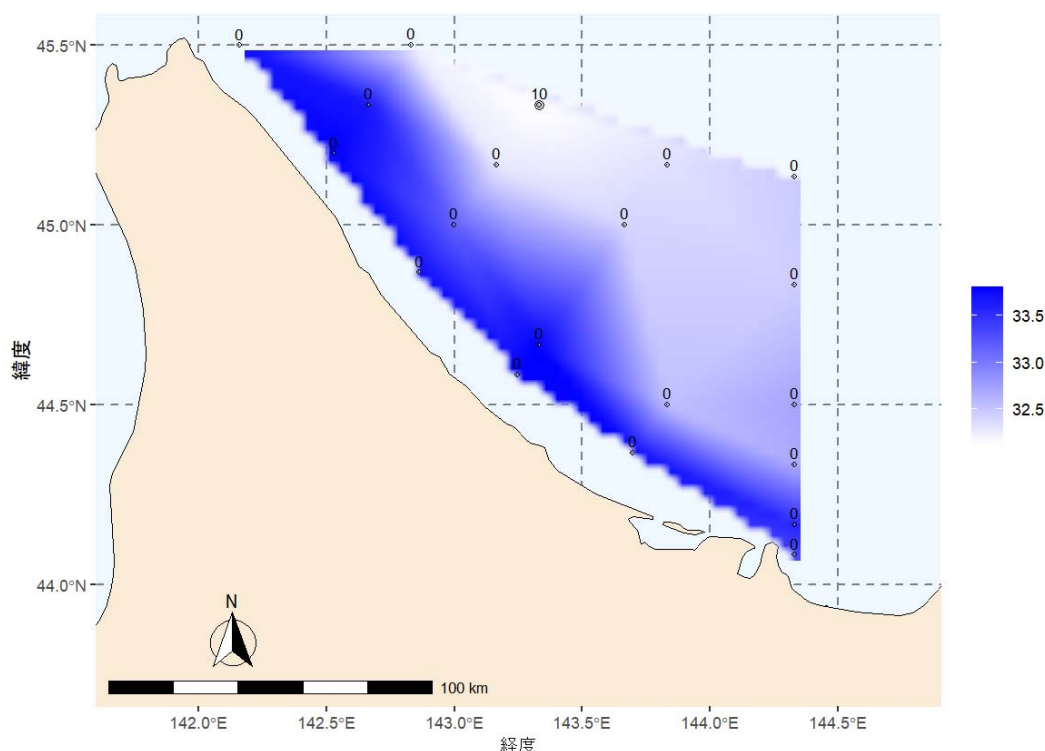


図1 R7(2025)年6/3-5の表面塩分(青コンター)と At(灰丸・数字, 細胞/L)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流, 稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果

*本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

オホーツク海貝毒プランクトン速報

(R7(2025)年6月上旬)

R7(2025)年6月12日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 宮園・品田)

●6月3-5日にオホーツク海で行った麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ・スピーシーズ・コンプレックス(旧アレキサンドリウム・タマレンセ), 略称「Atsc」)の広域分布調査の結果を速報します。

●Atscは、22定点中1定点で出現し、最高出現密度は10(細胞/L)でした(図1)。**毒化の目安となる100細胞/Lを上回った地点はありませんでした。**

●6月上旬現在、稚内から網走の方向に沿岸を流れる宗谷暖流の勢力は**例年並み**です(図2)。しかしながら、宗谷暖流の勢力が弱まれば、Atが沿岸のホタテガイ漁場に流入して、麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。宗谷暖流の勢力については、「オホーツク海宗谷暖流情報」として適宜お知らせする予定です。

●次回の広域分布調査は7月下旬を予定しています。

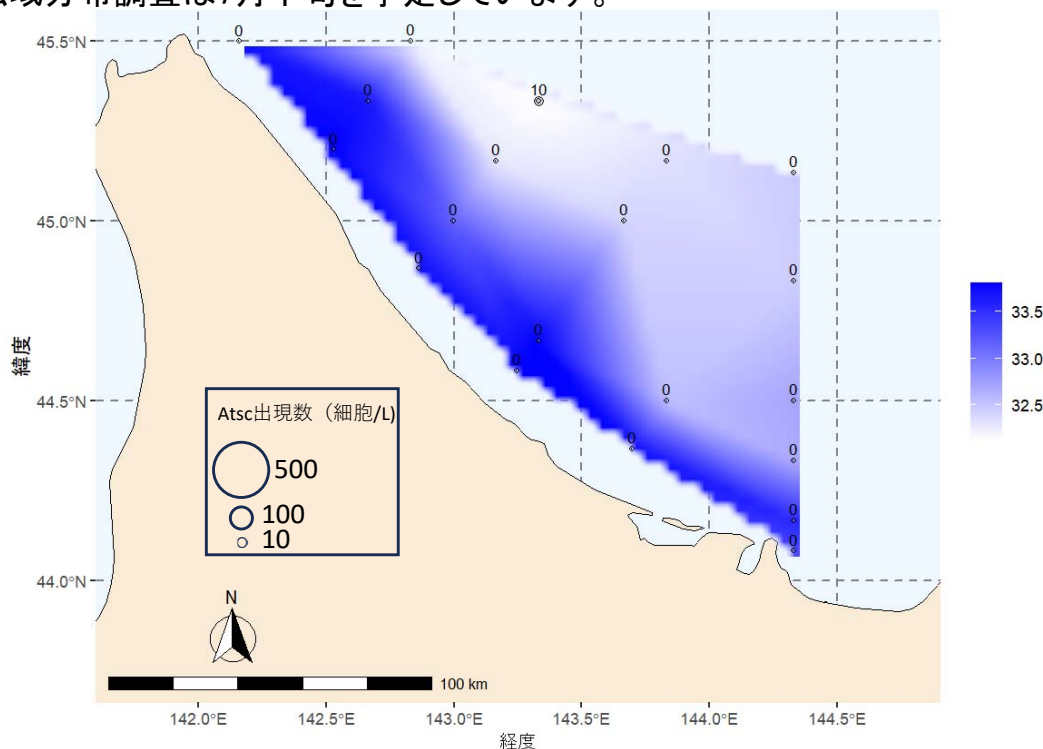


図1 R7(2025)年6/3-5の表面塩分(青コンター)と At(灰丸・数字, 細胞/L)の分布
沿岸の高塩分帯は宗谷暖流, 稚内水試所属試験調査船北洋丸による調査結果

*本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。

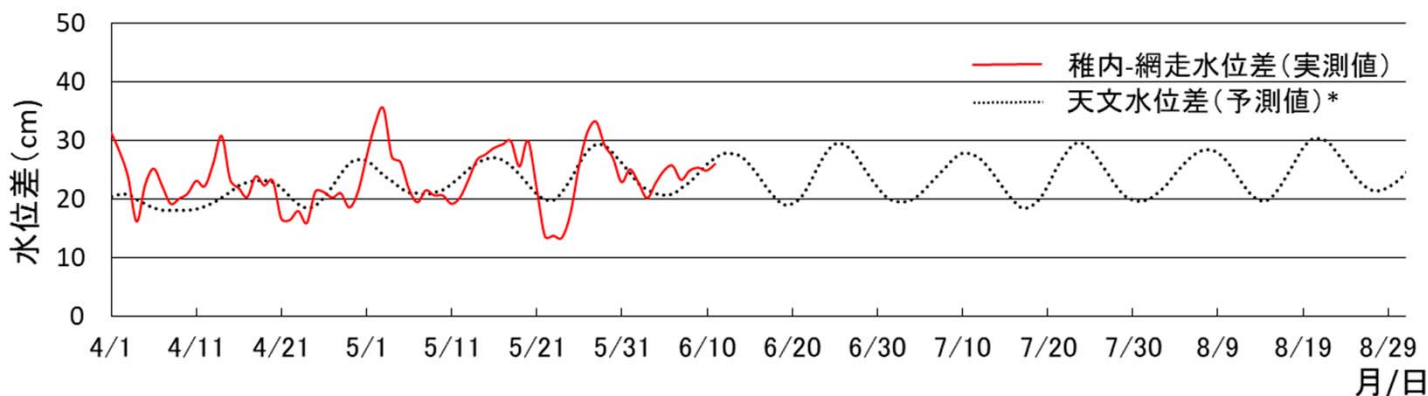


図2 R7(2025)年4/1-6/11の稚内と網走の水位差(宗谷暖流*の勢力)

*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。